
慟哭のアリア

水瀬藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

慟哭のアリア

【Nコード】

N2877K

【作者名】

水瀬藍

【あらすじ】

感情の赴くままに書き殴った紙片からお送りするショートショート集。

1・聖ヴァレンティーンスの導き

裏切りだなんて、酷い言い草。

わかつてる。人の心は移ろうものだから、仕方がないことなんだから。
って。

だけどやっぱり、そう簡単に納得はできないのだ。

貴方は私を忘れて、新しい女と幸せそうな毎日を過ごしている。
私は貴方の残滓に惑わされて、思い出の檻に閉じ込められている。
いったい、この差は何？

どうして私だけが、こんな惨めな思いをしなければいけないの？
勝手に別れ話を切り出して、勝手に決着をつけて。

貴方は私の都合なんてお構いなしだったよね？

自分勝手すぎるよ。

いつまでも引き摺って、何も変わっていない私がいるのに。

想いが薄れることなんてなくて、行き場を失った気持ちを持て余しているのに。

ねえ、毎晩のように孤独を慰める私の気持ちがわかる？

貴方には想像もできないよね。気持ち悪いって、思うのかな？

いつもそうだった。貴方は私の気持ちなんて、何もわかってくれなかった。

うつん、わかつともしてくれなかった。

自由に気ままで何事にも縛られない。

でもそんなところが眩しくて、好きなところでもあったんだ。
何がいけなかったんだろう……何が、か。きつと全部だよ。

私は初めから間違えていた。最後まで間違えてしまった。

贈る言葉も、貰う行為も、いまなら少しは理解できるのに。
もしやり直せるのなら、何か変わるのかな？

選択を間違っていないければ、違う結末もあったのだろうか。

最期に聞いてみたかった。

バレンタインデーに「会いたい」と連絡をした私に対して、彼の反応は鈍かった。

もう何ヶ月も会っていないけど、彼の困惑顔がメールの文面から想像できる。

もちろん新しい彼女との予定はあっただろう。

それほどイベントを意識するタイプではないのに、彼は律儀だから。

大事なひとにはマメなのに、それ以外となるとどうでもよくなってしまう。

熱するは難く、冷めるは易い。私はもう用済みということだ。

どうしても頼み込んだ私に折れて、渋々ながら彼はOKを出してくれた。

ただし夜遅い時間なら、と。私としても都合はいいのかもしれない。

……本当に些細なことなただけ。

メールを一、二通交わしただけで、どうしてもこんなにも愛しさが溢れてくるのだろう。

私は間違っている。けれど、後悔だけはしないつもりだったのに。

キッチンから一本借りて、慎重に布で包んだ。何重にもしないと危ない。

今日ばかりは、久しぶりにおめかしをして、少しでも可愛く見えるようにしたい。

目の隈が酷かったり、頬がこけてしまっているけど、化粧でなんとか誤魔化せる。

貴方がくれた洋服に身を包んで、漆黒のコートを羽織る。

貴方がくれた手袋をつけて、真紅のマフラーを首に巻く。

鏡の前でくるりと一回転すると、ドキドキと懐かしい気持ちで蘇

ってきた。

誰もいない家にお別れの挨拶をして、待ち合わせの場所に向かう。
待ち合わせは二十三時。

聖ヴァレンティーンヌスが殉じたその日のうちに、私もいかなければ。

駅の改札を通り過ぎるときには緊張した。

反応するわけないって、わかつてはいるけど。

無用心だなと思う。公共機関には金属探知機をつけるべきだ。

電車に揺られている間、手提げのバッグから覗く柄をじっと見てしまった。

どうしても鼓動が早くなるのは抑えられない。

遅刻魔の私が珍しく十分前に着いて待っていても、彼は珍しく遅れてやってきた。

ただでさえ短い逢瀬の時間。もったいない……彼女とお楽しみだったのだろうか。

下世話な妄想に思考を奪われそうになるが、かろうじて邪念を追いやった。

やっぱり、もう無理なんだね。

貴方がいなければ、奪われることに恐れる必要もない。

私は生きてるから、奪われることを恐れる。

同じ世界に二人は存在しちやいけないのだ。片方は居ちやいけない。

それなら消えるべきは……私は揺れていた。

正しくはない。どの選択も間違っではいるのだ。

けれど、後悔はしたくない。

思い出の公園に辿りついたとき、日付が変わる三十分前になっていた。

時間は刻一刻と迫っているのに、どう切り出しているのか分からない。

言葉よりも行動で。だからこそ難しい。

彼から話しかけてくれることは、ほとんどない。

話ベタなのか、私が相手だからなのかは、いまだに分からないけど。

私からアクションを起こさないと何も始まらないのだ。

「あのさ……えっと、彼女とは順調？」

苦笑いを浮かべて、どうしようもない一言目。

終わりにするために来たのに。手探りの言葉をぶつけて、馬鹿みたい。

きつと歪んだ表情で、寂しげに問いかけているのだろう。

こんなときにまで縋るような自分が情けない。

「新しい彼女ができたら一番に教えてくれるって、約束だったでしょ？」

強がって自分を制するために伝えた偽りの数々。納得なんてできてない。

貴方のせいで心を壊した。これはどうしようもない現実だけれど。傷ついたぶん、傷つけないと気が済まない。もう綺麗事を並べる段階は終わったのだ。

私って貴方にとって何？ もう友達ですらないよね？

恋人同士じゃなくても、親友になれるはずじゃなかったの？

新しい人たちと付き合い始めたなら、もう私は必要ないの？

だから捨てたの？ 用済みだから、捨てたの？

過去に置き去りにした人間は、単なる知り合いでしかないのだろうか。

「あのね……今日はお別れに来たの。ちゃんと、けじめをつけたくて」

手揚げから覗く柄を握り、引き抜く。

巻いていた布が冷たい風にさらわれて、はらりと地面に落ちた。公園の灯に照らされて、鋭い刃が光を反射した。

彼の驚きの表情を見て、私は満足する。そんな顔を見てみたかったのだ。

驚愕、怯え、恐怖。一方で現実を認識しきれていない混乱。

彼が立ち竦んで動けないうちに、そつと寄り添う。

包丁を逆手に握って、自分の胸に切っ先を合わせる。

そして、彼の手を取って柄を握らせようとした。

「貴方がいなきゃ、もう私は生きていけない。

生きていけないのに、怖くて自殺できないの。

ねえ、どうしてくれるの？

ちゃんと責任を取ってよ。ちゃんと終わりにしてよ。

お願い、殺して……殺せええええっ！」

私の慟哭が冬空に響き渡る。

彼は知らない人を見るような表情で私を見た。異物を見る目。異常者を見る目。

あの日の貴方はもういない。貴方は、もう私と一緒に歩いてはくれない。

ひとりで幸せに、なるんだね……

私は包丁を握らせるのを諦めて、腕をだらりと下ろした。

そっか……残念、だよ。

視界の端で大時計の長針が動くのが見えた。

じやりつと彼の靴が地面を擦る音がする。

私は後ずさるうとする彼に迫って、強引に唇を重ねた。

歪んだ彼の顔が、涙でぼやける瞳のなかに映し出される。

「ごめんね……さようなら」

最期の口づけと薄れゆく温もりを感じながら、私は瞼を閉じた。

2・私がない世界

たとえば、学校の屋上。

たとえば、駅のホーム。

たとえば、赤信号の横断歩道。

誰にだって向こう側へと踏み出したくなる、そんなときがあるはずだ。

だからわざとではない……とは言えないけれど。

少なくとも無自覚的に、私は境界線を踏み越えていた。

瞼の裏に焼きついた迫り来る影と、刹那に反転する夕暮れの景色。いまも奥のほうで響いている、金属が擦れ合うような耳障りな音。痛いのかもよく分からなかった、とにかく息が詰まるほどの衝撃。私が覚えているのはそれだけで、だがしかし覚えているのだった。

白い天井、白い壁、白いシート。白一色の世界。

もう使い古された形容しか思い浮かばない、無感動な認識。

ああ　ここは病院だ。

どこか神経をやられたのか、ろくに身体は動かない。

快復するのか、それとも既に麻痺してしまっているのだろうか。最悪な気分で胸中毒づいてから、私は空っぽの心を宙に曝した。

意識が戻ってから一週間も経つと、思考が現実世界に追いついてくる。

事故の翌日に目を覚ましたらしいから、感覚的にはそれほど体内時計のズレもない。

徐々に普段の自分を取り戻す作業。それは痛みを伴った。

生き延びてしまったのなら、いつそ植物人間にでもなれば良かったのに。

生活するのであれば、ベッドに横になっっているぶんには不自由ない。

日常的に金縛りを経験している私は、身体が動かせないという感覚になれていたから。

それなのに、リハビリをすれば生活には支障がないほど快復してしまうらしい。

またあの地獄に戻らなければいけないと思うと、気が滅入ってしまふ。

生きたいという欲求も活力もない。

だが、生きているからには生きなければならないのだろう。

入院しているあいだ、お見舞いに来たのは両親と数人のお義理の知り合いくらいで。

友達とかいうひとには一度もお目にかかれなかった。

お手軽な携帯のアドレス帳にすら登録されている人間は少ない。私にとっては名刺よりも軽い電子機器。あってもなくてもいい。

仕事で困ることはあっても、人間関係においては必須アイテムではないのだった。

私に不幸があっても、誰も気づいてくれない。

寂しいなんて感情はとつくに失われているけど。

それでも、どうしても空虚さを埋められない。

私はどうして世界に存在しているのだろう。

誰ともつながらない。誰ともつながれないのに。

きっかけは事故かもしれない。

けれど、冷たい現実を突きつけられて、私は決意した。

初めは乗り気でなかったりリハビリに、一生懸命に取り組むようになった。

そうはいつでも暫くはベッドから出られず、簡単なことしか出来なかったけど。

寝返りの練習や足を伸ばす練習。

上半身を起こせるようになり、手すりにつかまりながら引きずるように歩く。

松葉杖を借りてようやく歩けるようになった日。

私は母と別れてから、独り病室を抜け出した。

ごく自然な様子で屋上に出る。

重い扉を開いて、広がった世界に、私は息を呑んだ。

青い空、白い雲、眩しい光。そして、高く張り巡らした鉄柵。

ここは牢獄だ。そんな絶望が心に染み付いた。

いまの私は、死というものにすら望まれていない。

舌を噛み切るだの、首を吊るだの、私は自殺がしたいわけじゃない。

もう一度、境界線上に立って、裁きを下して欲しいだけだった。

もし死が私を望んでくれるのなら、連れて行って欲しいだけだった。

無意識の死を私は望んでいるのだ。

蒼白の壁に絶望して、私は病室へと引き返した。

しばらくは白の鎖に繋がれていなければならぬ。

リハビリはいずれ終わり、日常生活へと戻っていく。

まるで何事もなかったかのように続く日々。

上辺だけの友達は呑気に戯言を吐き出し、私はうんざりした。

誰も気づかないのか。いまでも私の歩き方は、少し不自然で不自由だ。

私は毎日、マンションの屋上に足を運んでいる。

世界の淵に立ち尽くして、血色の空を見上げる。

いつか私を死が攫ってくれる日を待ちわびながら。

いつまでも、いつまでも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2877k/>

慟哭のアリア

2010年10月11日18時35分発行